

瀬戸高校 図書館まつりの歩み

愛知県立瀬戸高等学校 河村 直樹

1. はじめに

陶磁器のことを「瀬戸物（せともの）」とも言うが、瀬戸とは地名のことであり、それを冠しているのが愛知県立瀬戸高等学校である。尾張丘陵地帯に位置し、瀬戸市内には今でも焼き物の町として多くの窯が存在している。また、陶磁器を運ぶために作られた鉄道が発祥となる名鉄瀬戸線は名古屋市の栄まで繋がっており、名古屋市営地下鉄名城線、JR東海中央本線、愛知環状鉄道とも接続して交通の便もまずまずである。その瀬戸線の最寄り駅から徒歩7分という立地



もあり、瀬戸市内だけでなく、隣接する尾張旭市、名古屋市、春日井市、長久手市からも通う生徒が多く、電車通学者の割合も多い。そして愛知県に数多ある高校の中でも、創立100年を迎えようとする伝統校である。かつては旧帝大への進学者を多く輩出しており、瀬戸市内の有力者の多くが瀬戸高校出身であることも事実である。しかしながら、現在の進学実績はお世辞にもよいものではなく、多くの県立高校がそうであるように、本校もここ数年は毎年のように定員割れと学級減の憂き目にあつ



ている。私が瀬戸高校に赴任したのも、まさに高校入試の第一希望者が急激に減っていく時期であり、あれこれと試行錯誤する中で、新聞に掲載されるような取り組みをしていたのが「図書館まつり」であった。

2. 展示の始まり

図書館関係の会議で図書館まつりの話をすると、必ず聞かれるのが「予算はどこから出ているのですか？」という質問である。それには図書館まつりが展示をメインにシフトしたきっかけから話さなければならない。



図書館まつりは、もともと秋の読書週間やクリスマスの時期に行う、1日だけのイベントであった。内容は図

書委員がグラスハープを演奏したり、吹奏楽部やフォークソング部などが図書館でミニコンサートをするというもので、恐らく似たような企画をいろんな学校でも実施しているだろう。だが、本校で実



施する意味は切実なものであった。読書はおろか自習に利用する生徒も少なくなっていた本校では、図書館がどこにあるのか知らない生徒も少なくない。図書館まつりは、こうした生徒を何とか図書館に足を運ばせるための苦肉の策であった。それが、あるきっかけから展示を主としたイベントに変わるようになった。

2008年、当時の校長から図書主任に「自分が趣味で集めている源氏物語絵巻の粉本や写本を生徒たちに紹介する機

会を作れないか」という申し出があった。資料的価値としてもぜひ生徒たちに見せたいという教育的な見地からの相談だったという。当時の校長は国語科であり、絵巻の造詣にも深く、また高名な書道の大家でもあったので芸術面にも理解があった。図書主任がとてもエネルギーで教育熱心な美術科教諭だったことも、校長が声をかけた一因だろう。かくして、校長肝いりの発案を受けた図書主任が、図書委員と美術部の連携のもと、図書館に展示をしたのが今の形の図書館まつりの始まりである。その時のやりとりから、「予算は10万ぐらいまでなら」という確約を取りつけたのが、当時の図書主任の手腕でもある。その流れで図書館まつりの予算は維持され、現在は図書館の予算に組み込まれている。

さて、これだけなら単年度だけの企画で終わった可能性もあったが、面白いことに翌年には本校の卒業生から、葛飾北斎の「富嶽三十六景」の復刻版画が寄贈されるという出来事があった。またしてもこのまま校長室の棚にお蔵入りするのは勿体ないという申し出によって、前年を超える大規模な展示となった。3年目には本校卒業生である歌人、永井陽子の名を冠した「短歌大賞」という学校行事が持ち上がり、図書館も連携して展示を行うことになった。この3年間の取り組みは新聞にも掲載され、校内発表のみとはいえ盛況だったようだ。なにしろ図書館中を展示ギャラリーにするのだから、見る人を圧倒するスケールで展示でき、おまけに美術の先生の監修のもとなのでクオリティも高い。そのため校内に批判的な意見が出ることもなく、「図書館まつり＝展示」という流れは続き、前任の美術の先生が退職されたあとを継ぐような形で私が図書部に入ることになり、翌年に主任となった。



れ、校内発表のみとはいえ盛況だったようだ。なにしろ図書館中を展示ギャラリーにするのだから、見る人を圧倒するスケールで展示でき、おまけに美術の先生の監修のもとなのでクオリティも高い。そのため校内に批判的な意見が出ることもなく、「図書館まつり＝展示」という流れは続き、前任の美術の先生が退職されたあとを継ぐような形で私が図書部に入ることになり、翌年に主任となった。

3. 図書館まつりを続けるのか

私が図書主任になったとき、はっきりさせておきたいことがあった。それは、図書館まつりをこのまま続けるのかということである。体裁としては学校行事ではなく、やらなければならないものでもなく、学習指導要領に書かれている類のものでもない。もちろん委員会活動の一環ではあるが、展示形式である必要はない。本校のレベルを考えると生徒への指導も難しく、また、文化祭ではクラス発表を行っていないため、“ひとつのテーマに向かってみんなで力を合わせて大きなことをする”という経験も積まれないから、すべてこちらでお膳立てしてイチから指導しなくてはならなかった。つまり、やらなくていいことをわざわざやっており、教員の労力も計り知れないほど膨大だったのである。昨今の教員の多忙化解消という時流に反してまで続ける必要があるのかという問いに対して、何度か図書部会で話し合いを重ねたが、「とりあえず今年もやってみる」で、ここまで続けてきたのが現実である。やめるのは簡単だが、ここまで形になったものをなくすのは惜しいというのが正直なところだろう。ただ私の中には、生徒の力をもうちょっと見てみたいという気持ちがあった。それは、地味でおとなしい図書委員の子らが作った砂絵が、美術教師の目から見てもあまりにも素晴らしい出来だったからだ。



4. 試行錯誤の繰り返し

こうして、私が主任になって初めての図書館まつりが『銀河鉄道の夜を旅して』である。初めてというのは恐ろしいもので、加減が分からないから全力だった。図書部の先生方も気さくな方ばかりで、雑談まじりに次々とアイデアを出し、それを実現化するために尽力した。特に女性の先生方は、細かくて手間のかかることでも生徒たちとうまくコミュニケーションを取りながら一緒に準備を進めることに長けていた。面倒くさがっていた生徒たちも、完成が見えてくるとテンションが上がるのか、文句を言うことが少なくなった。こうして、今でも語り草になるほど、ちょっと常軌を逸したレベルの展示が完成した。



しかし、あまりにも大変だったため、これを毎年行うというのは正直厳しいのではないかという思いも皆の中にあった。先生も生徒も入れ替わっていく中で、今後も同じようにできる保証もない。学校の組織として行うならば、誰が主任でも委員でもできる形にしていかなければならないのではないか。その観点から、翌年の『ムーミン谷へようこそ』は展示スペースを半分にした。これは、展示期間中、本棚を隠してしまうと図書の閲覧・貸出ができず、図書館本来の機能を損なっているという反省も踏まえている。しかし、展示スペースを半分にしても、準備の大変さはたいして変わらないということと、貸出数に変化がなかったことも判明した。



5. 先生の行事から生徒の行事へ

「うちの図書館まつりがすごい」という認識が生徒の中にも根付いてきていた。図書館まつりが新聞に掲載され、見学したいという問い合わせも受け、一般公開も視野に入れていこうという流れになっていく中で、図書委員の中に企画係を作るという形を取り入れた。これまではテーマも展示方法も教員が決めていたのだが、それは本校の生徒ではできないだろうという理由からであった。しかし、展示を見て新たに図書委員になった、あるいは中学生体験入学の時に展示を見て、図書委員になりたいと瀬戸高校に入ったという生徒が少しずつ増え、生徒主体の形にできないかと考えたのである。旗揚げしてみたものの誰も企画係にならないのではないかと心配したが、意外にも7人の立候補があった。しかもかなりやる気のある生徒たちだったので、テーマの選定から展示内容まで真面目に話し合っていて決まっていた。共通の目的に向かって一緒に作業していく中で、仲間ができれば大変なことも苦に思わなくなる。本来それは学校祭などで経験することなのだが、本校では図書委員会こそがそうした経験を得られる場となっていた。

こうして『不思議の国のアリス』は、企画係の意向で展示スペースを図書館全体に戻し、凄まじい物量とクオリティで実現した。人はどんな些細なことでも自分で決めたことは頑張るといふ心理があり、生徒が粘り強く制作していったことで形になった。そしてこの年から、保護者だけでなく近隣の方など一般の方も見学できる体制をとった。生徒の不良仲間が来るのではないかという懸念もされたが、それは杞憂に終わった。



6. ノブレス・オブリージュ

『不思議の国のアリス』の年から、企画係の中にとっても優秀な生徒が入った。彼女は将来イベント会社に就職したいという思いもあり、いろんな活動に積極的で成績も優秀であった。周りの生徒、特にやる気のない男子生徒へもひるむことなく声掛けをするいわゆるムードメーカー的存在で、その情熱にひっぱられて周囲もやらざるを得ない雰囲気を作っていた。時に辛辣な発言により反発を招くこともあったが、本人が誰よりもストイックに努力し、もてる力を存分に発揮していたため、崇拜的に慕う後輩もいた。その後輩が次の企画係のリーダーになるという理想的なスパイラルができていく中で、図書館まつり10年目となる『文豪ストレイキャッツ』は、『銀河鉄道の夜を旅して』以来の気合いの入った展示となった。



一部の生徒の情熱によって全体が感化されて完成度を高めた円熟期と言えるその時期は、新聞に大きく掲載され、一般公開には50年前の卒業生の方や近隣の保育園の子どもたちなど、多くの人々が来校した。また、瀬戸市立図書館と瀬戸北総合高校との「図書館めぐり」というイベントの一翼となり、地域との連携・交流という学校としての目標を図書館まつりが担う形になっていった。そうした活動を学校はPTAや中学校、あるいは教育委員会に対してことあるごとに喧伝し、本校における図書館まつりの立場はますます重要になっていった。

7. まつりは続くよどこまでも

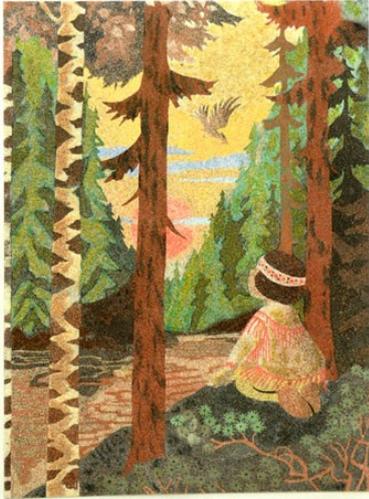
瀬戸高校がこのような形で図書館まつりができているというのは、偶然の賜物である。当時の校長のアイデアと申し出。情熱的な図書主任。協力的な図書部の先生。まだ予算に余裕があった時期。そうした条件が合致して、今の形の図書館まつりが成立した。だから、他の学校で同じようにやろうとしても正直難しいだろうと考える。例えばアイデアや予算があり優秀な図書委員がいても、図書館の通常利用者が多ければ、準備期間も含めて約1ヶ月もまともに図書館を利用できないということが問題になる可能性がある。本校は利用者が少ない故に、長期間展示で埋め尽くしても支障が出ない。つまり、瀬戸高校だからできるのである。図書館としては普段の利用者が増えるよう尽力し、かつ成果が出るのが本望であるとするならば、瀬戸高校の図書館のありようは自虐的な表現をすれば不本意かつ不健全である。しかし、瀬戸高校の現状を鑑みた時、今の形は与えられた状況を最大限に活かそうとしたひとつの形だといえる。結果として特色ある学校づくりに貢献しているが、それはあくまで結果である。我々が考えることは常に教育効果である。例えば、非日常を共有体験することでその小集団はまとまるのだが、まさに「まつり」は「非日常的な共有経験」のひとつの形である。図書館まつりという壮絶な非日常的経験が生徒たちの生きる力のための何らかの糧となることを願って、瀬戸高校図書館は今日も頑張っている。

最後に、心理学者エーリヒ・フロムの言葉で締めたいと思う。

「(富や権力を)『持つ様式』ではなく

(自分が自分で)『在る様式』の生き方こそが、真実の強さと自由を獲得する。」

◆図書館まつりで制作したものの一例



美術出版社の砂絵キットを購入。B4サイズで12色の砂付き。絵本の挿絵をコピーしてベースシートに貼る。カッターで切ると接着面が出てくるので、砂をまぶせば定着する優れもの。

20cmの模型を紙粘土などで作り、10倍にして岩手軽便鉄道の機関車を作成。主な材料はプラダンとスタイロフォーム。黒いプラダンは無塗装で使用。

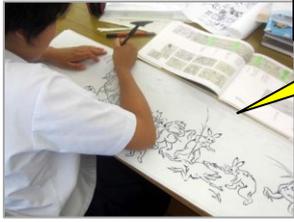


直径4メートルのプラネタリウムドーム。分割図面を描き、型紙に合わせてプラダンをカットして白ガムテープで貼り合わせている。投影機は理科にあった年代もの。1度に15人は入ることができた。

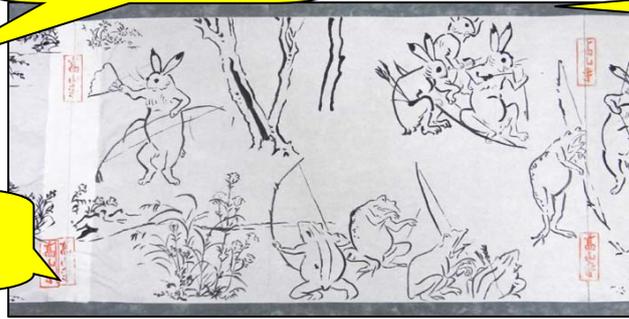


ムーミンからはフィギュアの制作が定番に。スタイロフォームを削った上に、紙粘土で細部を成形。半紙を貼り、アクリル絵具で彩色。軽いので落としても壊れにくいのが利点。ちょっとブサイクなのはご愛敬。





障子紙に筆ペンで模写



襖の裏紙に貼りつけ



「高山寺」という朱印は消しゴムハンコで自作

国会図書館のデータから「鳥獣人物戯画」の画像をプリントアウトし、障子紙に筆ペンで模写。それをつなぎ合わせて襖の裏紙に貼り、巻物風に。全長17メートルのほぼ実物大。



中古の車イスと一輪車を分解して日本最古の手こぎ式自転車を再現。



厚紙で作った走る電車。中は電池で動くおもちゃ。



100均のフェルトで作ったはらぺこあおむし。中の綿は不要になった布団。



レンガ状に小さく切ったダンボール2000枚以上を壁紙シートに貼って作った鹿鳴館。

ガス灯は塩ビ管に紙粘土で細工



ネコ型ロボットの頭はバランスボールを芯にした張りボテ。作り方は星の王子さまでも応用。



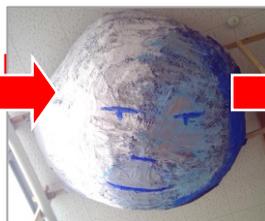
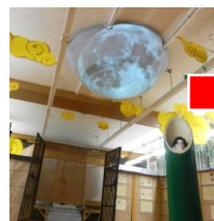
リサイクルも大事です



プラネタリウムを半分に割り逆さに置いて展示パネルに



ムーミンの家は翌年のアリスでも使用



竹取物語の月 → はらぺこあおむしの月 → 星の王子さまの星

図書館まつりの歴史

<p>2008</p>	<p>「源氏物語千年紀展」</p> <p>当時の校長が入手した「源氏物語絵巻」の粉本や写本を生徒のために紹介できないかと持ちかけられたのが始まり。それらを額装や台紙に貼るなどして展示。額やイーゼルは美術部のものを拝借。</p>	 <p>源氏物語千年紀展 図書委員会・図書部</p>
<p>2009</p>	<p>「伊能中図展・富嶽三十六景展」</p> <p>卒業生から本校に「富嶽三十六景」の復刻版画が寄贈されたので、その紹介展示をするための企画。富嶽三十六景が描かれた場所が分かるよう、美術部協力のもと伊能図（中図）も制作して展示。</p>	
<p>2010</p>	<p>「没後10年永井陽子展」「瀬戸高校短歌大賞展」 「百人一首歌織物展」</p> <p>本校の第22回（昭和45年）卒業生で歌人の永井陽子さんの没後10年を記念した企画。短歌大賞は校内に限らず広く公募。百人一首をテーマにした展示も。</p>	
<p>2011</p>	<p>「人と地球 I. 刻一時空の流転 II. 地球の生命と進化 III. 未来へのメッセージ」</p> <p>日本画家、柳沢正人氏の作品「刻一時空の流転」をベースにした展示。会場を二重円状にし、地球の歴史を図、表、文学作品、言葉などで展示。</p>	
<p>2012</p>	<p>「円環（サークル）～ネイティブ・アメリカンの世界とその叡智－自然との共生～」</p> <p>自然とともに生きるインディアンの文化と関連書籍の紹介展示。完全に当時の図書主任の個人的趣味で決まったテーマ。</p>	
<p>2013</p>	<p>「銀河鉄道之夜を旅して ～宮沢賢治の世界～」</p> <p>前図書主任のご専門であり、最後にこれがやりたかったという意味を汲んだテーマ。天文同好会の協力もあり、過去最大規模の展示となった。宮沢賢治が没後80年だったと完成後に知って驚いた。</p>	
<p>2014</p>	<p>「ようこそムーミン谷へ ～トーベ・ヤンソン生誕100周年～」</p> <p>ジオラマやフィギュアなどを作って、ムーミンの世界を立体的に展示。作者のトーベ・ヤンソンが生誕100周年だったのはなんと偶然。</p>	

<p>2015</p>	<p>「不思議の国のアリス～150年のワンダーランド～」</p> <p>初めて図書委員の話し合いで決定した企画。前年の経験を生かして、生徒たちが展示方法、内容、準備のグループ分けなども行った。出版から150年目。</p>	
<p>2016</p>	<p>「MANGA」</p> <p>前年に水木しげる先生が亡くなり、藤子不二雄先生と赤塚不二夫先生が生誕80周年の年ということで、漫画をテーマに。鳥獣戯画絵巻をほぼ実物大で再現。</p>	
<p>2017</p>	<p>「文豪ストレイキャッツ～明治・漱石150年～」</p> <p>文豪ブームにのったテーマ。瀬戸蔵ミュージアムから骨董をお借りして展示したり、瀬戸市立図書館と瀬戸北総合高校と連携した図書館めぐり企画も実施。</p>	
<p>2018</p>	<p>「竹取物語」</p> <p>本物の竹を使ったり屋敷の扉や月を制作して、物語の世界を再現。図書館めぐり企画は市立図書館からのバスツアーまで企画され、加えて初めてグリーンシティケーブルテレビでも放送された。</p>	
<p>2019</p>	<p>「はらぺこあおむしと絵本の世界」</p> <p>「はらぺこあおむし」と「あんぱんまん」が50周年。校内アンケート上位10作品を調べて紹介。エリック氏の制作技法「コラージュ」を再現し、絵本風に展示。一般来場者数が136人と過去最多となった。</p>	
<p>2020</p>	<p>「星の王子さまーサン＝テグジュペリ生誕120周年ー」</p> <p>読むたびに感想や解釈が変わると言われる物語の魅力とはなにかを探る。コロナ禍で開催も危ぶまれたが、図書委員の熱意によって、短い準備期間で形に。</p>	



図書館まつりは今年で13年目を迎え、瀬戸市立図書館との連携も始まり、新聞やテレビで紹介されるまでになりました。今や本校の特色のひとつになっており、図書委員になりたくて本校を受験する生徒もいるほどです。委員の中の積極的なメンバーが企画係となって、テーマ決めから準備・制作まで生徒主体で進めていく体制をとっていますが、準備は毎年必ず熾烈を極めます。